

森下洋子談「人間発見、感謝込め舞台から愛を」日本経済新聞 2009年9月29日夕刊を読む

感謝込め舞台から愛を

1. 12歳のとき「運命」で主役デビュー。「天才バレリーナ」と注目を浴び、雑誌のグラビアにも次々登場した。若くして日本を代表するプリマとして羽ばたいた陰には、バレエの師たちの優しくも厳しい教えがあった。
2. 広島で3歳でバレエを習い始めたとき指導した下さったのが、葉室潔先生、次に習ったのが洲和みち子先生でした。洲和先生はとても厳しく、つま先立ちをゆるめると「根性がない」とはたきの柄のような細い棒でピシッとぶたれました。みみづばれができるほどでしたが、母は黙って薬を塗ってくれました。そのときの先生の本気で子どもに向き合う迫力は、今でも鮮明に覚えています。子ども心にも「大人が本気で子どもを怒るというのは、ものすごく信頼してくれることなのだ。もっと真剣に取り組まなくてはと有難く思ったものでした。
3. 中学生に入ると東京・吉祥寺にある橘^{たちばな}秋子先生のお宅で内弟子のような寄宿生活が始まりました。朝、学校に行き、放課後はすぐに戻ってレッスンに励むという生活でした。舞台上で忙しく、学校行事にはほとんど参加できませんでした。夜遅くまで衣装を縫い、自炊をし、レッスンの合い間に下級生のお弁当を作ったり、世話をしたりしていました。
4. 日本人としての教養を身につけるために、礼儀作法などを学びました。また、主役として舞台上立つ精神力を養うため、真冬に滝に打たれる修行もさせて頂きました。主役で舞台上立つということは、厳寒の滝つぼに入る勇氣より厳しい精神力が求められます。この修行で風邪を引くようでは、主役を踊る緊張感と自覚が足らないと鍛えられました。舞台はオーケストラなど多くの人が心を合わせてつくるものです。一緒に舞台をつくるすべての人々への感謝と思いやりをもち、自然に人々がついてくるように人間性を磨かなければならないという、主役を踊る心構えを教えて頂いたと思います。
5. 私の人生は様々な方との出会いに恵まれ、たくさんの方を教させて頂きました。両親が私から手を放してくれたおかげで、多くの方のあたたかい支えを感じられたことに感謝しています。

[コメント]

プリマドンナ、日本の、また、世界の森下洋子さんのバレリーナとしての手記。主役を踊る緊張感と自覚、心構えがよく伝わる素晴らしい手記。何十年か前に見た森下さんのジゼルが思い出された。

- 2009年9月30日 ホーチミン市にて、林明夫記 -